椙山女学園大学研究論集　第47号（社会科学篇）2016

形成期のアーネスト・バージェスを解読する
——序説——

鎌　田　大　資*

Deciphering Ernest Burgess in the Making
—An Introduction—

Daisuke KAMADA

論者は1980年代にシンボリック・インターラクショニズム（Symbolic interactionism, 以下，SI と略記）の研究に着手し，1990年代には初期シカゴ学派の社会学者たちの研究を開始した。そして21世紀に入ってからは，そのなかでも特に研究の手薄なアーネスト・バージェスに関する考察をつづけてきた。本論ではバージェス研究史上，まともに学問的に検討されず未踏の領域となっている彼の博士論文（Burgess 1916）や，その知的背景の検討に足を踏みいれる。その学問的生涯のなかでもそこにだけ，彼が20世紀社会学を形成していく道程の，最初の段階でもちこんだ微妙な知的，宗教的立ち位置の片鱗が表明されていると思われる。

20世紀におおむね現在のような形をなすに至った社会学を，21世紀に生きるわれわれが学び，活用しつづけるためには，あるいは19世紀の学問としての誕生段階にさかのぼっての再解釈が必要になるかもしれない。たとえば質的社会調査と量的社会調査を知的生産の両輪とする社会学の発生，成立の諸段階を，その現状の表皮を剥ぎとって新鮮な姿で眺めなおすといったことすら，現在のわたしたちには意外にむずかしい。アルビオン・スモール，チャールズ・ヘンダースンをはじめ，20世紀初頭のアメリカの社会学者には牧師出身，またはその家系から出た神学的素養の強い人たちが多い。そうした学説史的な常識を認める人は多くても，それだけを材料にして20世紀に知的，政治的に変容を迫られたキリスト教神学が，変貌を遂げて社会学になるといった単線的理解による知識社会学が，可能になるわけでもない。

キリスト教神学に根ざす生活態度が，19世紀に変容を強いられ20世紀の社会学の基盤となるには，改心，改宗，信仰対象の取替えなどの立場変更を強いられるだけではすまないだろう。そうした知的経験を学説史的に追体験し再現するためには，個々の社会学者が編みだしていった根本的に新しいものの見方の登場の根源に遡る深い溝を見いだし，それを踏破しつつ吟味しなおす試みが必要であろう。

*　人間関係学部　人間関係学科

１．20世紀社会学史におけるバージェスの位置づけ

20世紀の社会学や社会調査へのバージェスの貢献を考察するためには，近世以降の歴史において現在の社会調査そのものをどのように位置づけうるかを，自分なりの歴史観にもとづいて検討する必要がある。

20世紀初頭の社会学は，先行する多方面の社会科学や学問業績の総合から，何かを作りだそうと懸命に努めてきた思弁的な段階を抜けて，社会学者が独自の視点から社会についてのデータを作成し理論化しようとする実証的な段階に達しつつあった。そのころ，エスノグラフィやフィールドワークなどから，社会生活の記述に基づいて人間の社会生活に関する理論化をおこなう質的社会調査と，量的社会調査と呼ばれる質問紙調査の諸実践を，バージェスは両方とも推進した（Burgess 1927）。その両者の相補性を主張する方法論論文を公刊していた社会学者は，当時，実質的にバージェスただ一人であった。その意味で，バージェスこそ，現状の社会調査の基礎を築き，現在の社会学そのものを作りあげるうえで大きな貢献をした人物であろう。

バージェスは，20世紀初頭のアメリカ社会学に支配的な地位を占めていたシカゴ大学の大学院で，1908年から学び，1912年以降，中西部の３つの大学に奉職して，シカゴ大学には1916年より改めて教員として着任し，1952年に公式には引退するものの，最晩年に体調を崩して実質的に引退するまで，長い生涯をシカゴの地において社会学研究と後進の指導に捧げた。社会学の歴史は社会調査の歴史だと論者は考えているが，20世紀初頭の段階では社会調査としてなすべき実践の内実はまだ定まっておらず，まさにバージェスらが1920年代から自身の研究と後進の指導を通じて作りあげたものが，現代の社会調査に引きつがれてきている。いわば，バージェスは社会調査を現在の形に組織したオーガナイザーであり，しかもほかの社会調査者と比べても特徴ある主張をした人物である。その研究史は以下のように４つに区分できる。

表１　バージェスの研究経歴の時期区分

a．1908–16年　形成期：スモールに感化を受け歴史を題材とする理論社会学およびソーシャル・サーベイ

b．1916–28年　パークとの協同とケース・スタディ期：『科学としての社会学入門』（Park & Burgess [1921] 1924），児童研究的なケーススタディ，シカゴ・モノグラフの指導

c．1928–53年　予測研究期：仮釈放，結婚，婚約の予測研究の実践と指導（Burgess 1928; Burgess & Cottrell [1939] 1998; Burgess & Wallin 1953），『家族』初，二版（Burgess & Locke [1945] 1953），シカゴ・モノグラフの指導の継続

d．1953–66年　老年学研究と活動的退職期：『西欧社会における高齢化』（Burgess 1960），『家族』三版（Burgess et al. 1963），シカゴ・モノグラフの集大成『都市社会学への貢献』（Burgess & Bogue 1964）

２．バージェスの学問的形成期を検討する際のいくつかの留意点

資料の制約もあり，まだ研究者，指導者としてのバージェスの知的評伝はまとめられていない（Howard 1981: 88, n. 31=1987: 177–178, n. 31）。従来の研究では，あまり注目され

ていないが，社会学研究史上，重要と思われる点を以下に列挙する。

a．バージェスの大学院生時代から博士論文公刊にいたる形成期には不明な点も多い。そのころ，バージェスの指導に当たった教員として想定できるのは，スモール，ジョージ・ヴィンセント，ヘンダーソン，ウィリアム・トマスであり，市民向けのエクステンションを主に担当し1908年に退職したチャールズ・ズーブリン[1]とも，ジェーン・アダムズが主宰するセトルメントであるハルハウスなどで，交流していたのではないかと推測できる。シカゴ大学の大学院生としての，バージェスの生活に関する資料はほとんど手に入らないが，こうした人々からの影響関係について推測できる限りで考察していく必要がある。

一般論として，20世紀初頭の社会学を学ぶ大学院生の精神形成について知ろうとすれば，その学生を指導した教師たちの19世紀末以降の業績や作品について調べる必要がある。公刊文献を手がかりに，そうした教師たちが活用したであろう19世紀後半の欧米における思想動向全体に関しても，さらに考察を広げるべきだろう[2]。

b．シカゴ大学での教員としてのキャリア初期には，ロバート・パークとの協同により，20世紀前半のアメリカでの社会学教育史において大きな役割を果たした教科書『科学としての社会学入門』（Park & Burgess [1921] 1924）が執筆，編集，公刊されている。1920年代前半にはバージェスの業績として，トマスの形式にならう児童社会学家族社会学のケーススタディ論文があり，質的研究が優位にある時期と考えられる（Trent 1987）。ただし1925年に出版された『都市』（Park & Burgess [1925] 1984）所収の，都市の発達に関する「同心円図式」論文（Burgess 1923）の執筆もおこなわれている。当図式は多変量解析が一般化する以前に，統計的データを視覚的に提示する図表（cartography）的な研究に属するものとして，30年代終わりにシカゴスタイルの都市社会学への批判がおこなわれはじめるまでは，多くの研究者の業績が蓄積される枠組，雛形として機能した。また同心円図式は，都市研究に量的分析のセンスをもちこむグラジエントの着想と併用され，地図上でクロス表を作成するような効果を果たす技法として開発されていった（Burgess 1927a）。この研究法は直接には，バージェスの前任者のヘンダースンやズーブリンが，19世紀のゲリーの犯罪研究を継承した議論（Zueblin 1898; Guerry 1833）を再現したものと考えられる。

c．1930年代にはパークが海外に視察旅行に出たり，客員教授として他大学に出向したりするなか，学部長となったエルスワース・フェアリスとともに，バージェスが実質的に学部の切り回しをする指導的な立場になっていったと思われる。この時期から1952年の引退までは彼のキャリア中期を構成する。シカゴ大学育ちの個性的な教員のあいだには，たとえば批判的理論派のハーバート・ブルーマーと，質的な調査の指導と理論化を進めたエヴェレット・ヒューズなどのあいだなど，不和，反目，確執が絶えなかったとされるが，バージェスが常に間に入って調整をおこなうことで，それぞれの才能が縦横に発揮される場が確保された（Abbott 1999: 34−79=2011: 47−109）。

この時期には，1927年から取りくんできた量的研究が本格化する。

そして，バージェスはアクチュアリー（actuary, 保険数理）の技法を仮釈放の成否の予測研究に適用し，その後の司法行政への社会学者の進出を促した。すなわち，この試みにより各刑務所に配属される社会学者兼アクチュアリーという専門職種が誕生し，社会学を

修めた多くの犯罪研究者が送りこまれた（Ohlin 1951など）。

その後，すぐに結婚や婚約の成否の予測研究に取りかかり，L・L・サーストンの態度尺度，因子分析（Thurstone 1928, 1947）を取りいれ大量の変数を扱う先駆的な研究，分析を実施，指導した。この先駆的な量的社会調査の試みは，『アメリカ兵』調査（Stouffer et al. [1949] 1977, [1947] 1977a）で知られるサミュエル・ストゥファーの解析チームをはじめ，多くの研究者にも共有され量的調査の解析手法開発にも貢献した（Stouffer et al. [1950] 1973）。予測研究は基本的にバージェスを中心に進めた大規模プロジェクトであり，多くの量的社会調査にかかわる研究者が関与していた。しかし彼にとって残念なことに，1950年代前半に各方面から方法論的批判を浴びて失速し，ストゥファーが早世した1960年あたりを境に忘却されていった。現在では，あたかも社会学説史上のブラックホールに埋没してしまったかのごとく不可視のものとなっており，彼の生涯の大部分を捧げたこうした研究（Burgess & Cottrell [1939] 1998; Burgess & Wallin 1953）とともに，バージェスの業績評価全体を見通しをつけにくいものとなっている。

d．キャリア後期には，予測研究を中心にすえた教科書『家族』（Burgess & Locke [1945] 1953）をはじめとして，家族研究の書物をまとめ，晩年は老年学という新たな学問分野の創設に尽力し，モービル（トレーラー）ハウス研究に集中した（Hoyt 1954）。

この間，1927年には主に経済学部の授業の聴講により，社会学部の学生の需要を満たしてきたシカゴ大学社会学部の統計の教師として，ウィリアム・オグバーンを招聘し，1940年代にアメリカを代表する社会学における統計的研究者となるストゥファーを指導，後援し，オーストリーから亡命してきたユダヤ人社会主義心理学者，ラザースフェルドを社会学界での意識調査の担い手として定着させるなど，量的社会調査の振興におけるバージェスの貢献はたいへん大きい[3)]。またバージェスは上記のような活動をおこないつつ，前述のように方法論的には量的社会調査と質的社会調査の相補性を主張しており，現代の社会調査の標準的な考え方の先駆者としても明記されるべきである。名目上，質的社会調査と量的社会調査を車の両輪のように進行させていこうと主張する研究者は現在でもいるが，多くの場合，それはうわべだけのものであり，量的調査と質的調査の両方に手を染める者はそれほどいない。両者は似て非なるもので，両方を手がけることで研究が中途半端になるという考え方も耳にすることがある。確かに教科書『家族』（Burgess & Locke [1945] 1953）にもちりばめられ併用されたケーススタディと統計数値のため，バージェスの研究が中途半端に終わってしまっている印象を受けるかもしれない。だが，誰かが両技法を併せもちいていく可能性を示さなければ，一方が他方を締めだして社会調査の市場を独占してしまう事態にもなったかも知れず，その場合，後世の社会調査者が支払う犠牲はかなり大きなものとなっただろう[4)]。

本論ではこのようなバージェスの社会学研究の最初期に当たる「形成期」を考察する手がかりとして，その博士論文を取りあげ，その特性を検討してバージェスによる19世紀社会主義思想の摂取と換骨奪胎について考察する。シカゴ学派社会学の形成に関しては，バージェスとパークが協同した『科学としての社会学入門』（Park & Burgess [1921] 1924）以降にのみ注目して研究することが通例となっているが，バージェスの生涯を検討する際に散見される「謎」のいくつかは，この時期の社会主義摂取の実態に遡らなければ解くことはできない。

３．バージェスの博士論文の基本コンセプトおよび当時の社会化概念の含意

議論の前提を確認するために，最初にバージェスの形成期に関する年譜を挙げる。幼児のころにカナダから家族とともに移民した点や22歳でシカゴ大学の大学院に入学してはじめて社会学に触れた点，4年後に就職し，その後1年で博士号を取得している点，その博士論文を出版するのが，改めてシカゴ大学に若き助教授として着任してからである点などは，学問業績の評価解釈にはそれほど関係してこないが，学説史研究者の意識からは抜けおちがちな諸点なので，再度，確認しておきたい。

表２　バージェス形成期年譜（成育史および学歴）

1886 カナダ，オンタリオ州ティルベリイにてイギリスからの移民三世として誕生（0歳）
1888年 両親とともに渡米
1903–04年 ベンゾニア・アカデミー（Benzonia Academy）[5]入学
1908 キングフィッシャー・カレッジ卒業，学士号取得，シカゴ大学大学院社会学部入学
1912–1916 トリード，カンザス，オハイオ州立大学を歴任
1913 シカゴ大学で社会学において博士号取得
1916 シカゴ大学に着任（30歳），『社会進化における社会化の機能』（博士論文）（Burgess 1916），「ソーシャル・サーベイ」（Burgess 1916a）
1917『ローレンス・ソーシャル・サーベイ』（ブラックマーとの共著）（Blackmar & Burgess 1917）

前述のようにバージェスの学問には，先行世代であるスモール，ヴィンセント，トマスらの媒介により，啓蒙思想時代のコンドルセ以降の諸思想潮流が流れこんでいる。ヨーロッパにおける絶対王政期以降の思想史における量的社会調査と質的社会調査の位置づけは，今後の研究で解明されるべき課題である。

本論とその姉妹編（鎌田 1916）ではバージェスの最初期の業績である博士論文を中心に，そこから読みとれるフェビアン主義とのかかわりとその継承の独自性を指摘する[6]。19世紀に社会主義者と命名された人々の思想傾向は多様であり，フェビアン主義以外にもキリスト教社会主義，サン–シモンおよびサン–シモン主義，コントおよびコント主義などがシカゴ学派社会学との関係で重要である。まず博士論文の章立て，節立てを提示しその構成を概観する。

表３『社会進化における社会化の機能』（Burgess 1916）の章立て

序 pp. 1–3.
第1部　発見と発明における社会化の役割 pp. 5–67.
　第1章　発見と発明 pp. 7–8.
　第2章　社会化の機能としての保存 pp. 9–20.
　第3章　社会化の機能としての創出（origination），その1，社会的遺産 pp. 21–37.
　第4章　社会化の機能としての創出，その2，社会組織 pp. 39–51.
　第5章　社会化の機能としての創出，その3，社会的刺激と要求 pp. 52–67.

第 2 部　社会の進歩における社会化の役割 pp. 69−174.
第 6 章　社会の進歩 pp. 71−74.
第 7 章　社会化の血族的段階 pp. 75−86.
第 8 章　社会化の個人的段階，その 1 ，封建的タイプ pp. 87−108.
第 9 章　社会化の個人的段階，その 2 ，タウン・タイプ pp. 109−136.
第10章　社会化の非個人的段階 pp. 137−174.

第 3 部　個人の発達における社会化の役割 pp. 175−237.
第11章　個人の発達 pp. 177−181.
第12章　社会化の認知的側面 pp. 182−202.
第13章　社会化の情愛的（Affective）側面 pp. 203−220.
第14章　社会化の意志的（Volitional）側面 pp. 221−231.
第15章　結論 pp. 232−237.

現在の社会心理学で標題の「社会化（socialization）」は，マーガレット・ミードらを中心に展開した文化人類学の「文化とパーソナリティ」学派や，幼児期，思春期のパーソナリティ形成における両親の影響などを重視するフロイト主義により，「社会で流布している主流の価値を子どもが内面化する発達過程」という意味の言葉になっている。質的データを活用する社会学的な社会心理学では，ジョージ・ミードの講義録（Mead [1934] 1962=1973/1995）にもとづき，プレイ段階とゲーム段階に関する理論を援用して論じられるのが通例である。しかしそういった意味は，バージェスの博士論文執筆当時から十数年でドラスチックな意味の変容がなされた結果，付与されたものである。ただし本書第 3 部は，社会における人間形成という現行の意味で社会化という用語を活用するための，理論的予備考察にあてられている。そして社会化に関し，のちに人類学，社会学，心理学が一丸となって推進する理論化の方向性は，バージェスが整理しようとしている形とほぼ一致している7)。そのことを考えると，本書は「社会化」概念を現行の意味に向けて押しやる最初の一歩になったといえるかもしれない。

ダニエル・ベルのまとめにしたがうと，最初にフランスでサン−シモン主義者を社会主義者と呼びはじめた。社会化という言葉は，1830年代のフランスで，個人主義に反対する社会主義者（socialist）とサン−シモン派を呼んだことから，社会主義（socialism）という言葉とともに流通しはじめた（Bell 1968: 506−509）。その背景にはフランス革命からナポレオン戦争，急速な工業化にともなう社会の混乱と，勃興しはじめた産業資本による労働者の過酷な搾取などの社会的混乱が存在する。ブルジョワたちは地域共同体の規範を無視して個人の利害を追及したが，そうした風潮を個人主義と呼ぶ。それに対して新たな価値観にもとづいて共同体を再興し，秩序の再建を図ろうとする考え方が，19世紀半ばの社会主義であった8)。サン−シモン派が社会主義者と呼ばれたのはサン−シモン自身の死後のことだが，コントはサン−シモンの秘書としてフランス思想界にデビューしている。もしもコントが社会学という言葉を，世界で最初に印刷物のなかで使ったという事実を重視するなら，社会学という名称自体が社会主義起源ということになる（Comte [1830−1942] 1968−1969, Vol. 4: 200−201. この巻は1839年初版）。

バージェスは博士論文第 1 ，2 部で，有史以来進行してきた社会化の諸相をイギリス史の各時期をたどりながら再構成している。すなわち，当時，通用していた「社会化」概念

の意味に沿って，イギリスにおいて19世紀末から20世紀初頭に議論されたような「土地，資産，産業の国有化，共有化」という意味を最終到達点として，イギリス史が整理されている。その最終段階の，労働組合運動の意義や，資源，産業の社会化を語るあたりでフェビアンたちの知見が援用される[9)]。

しかしそこにいたるまえに，博士論文の全体コンセプトから説明を始めるべきだろう。

本書の序文は，レスター・ウォードとスモールの論争におけるウォードの主張を，スモールが批判的に取りあげて論じている内容に関連づけ，スモールの論旨を論証する構成になっている。

ウォードは物質文明の進歩が蓄積することから人間の進歩を捉える立場をとった。たとえば『純粋社会学』では物質的文明に主眼を置いて文明を捉え，精神的文明はその上に花開くとした。『動的社会学』では情報が心理学的な系列において自然に伝わっていくと考えた（Ward [1883, 1897] 1911, 1903）。

これに対し，人間はそれぞれに独自に精力を注いで精神的内容を作りあげると，スモールは考える（Small 1903–1904）。また目的を社会の動因とし，価値の進化を人間進化の中心過程と見る。ウォードに対するスモールのこうした論難を下敷きに，はっきりと言及してはいないが，バージェスはヴィンセントの博士論文（Vincent [1897] 2009）のコンセプトを取りいれつつ，論全体を構成しているように思われる。ヴィンセントは博士論文で，社会進化論の考え方により紀元前のギリシャ哲学以降の人類史上の知的達成を，時代や分野ごとに分類，整理，目録化し，当時の若者が体系的にその要旨を理解し，体系的に習得，活用できるようにカリキュラムやシラバスを考案，作成し，そうした知的蓄積を意識した教育体制を形成するよう計画した。そしてそのための授業シラバスの雛形を提示した。

ちなみにバージェス自身の社会化の定義は以下のようなものである。

> 集団（group）の視点からは，集合での活動（collective activities）への個体（individual）の心の分節化（psychic articulation）と，わたしたちは［社会化］を定義してもよい。個人（person）の視点からは，集団の精神と目的，知識と方法，意志決定と行為に個体が参加することである。（Burgess 1916: 2）

実はこの定義から何を汲みとるべきか，個々の用語法の背後にある含意を当時の学問的文脈においてどのように解読すべきかなどを，論者はこの一節からは今ひとつ判明に理解できない。しかし博士論文全体の構成を加味して推量すれば，社会全体における資源や産業の社会化（公共化，国有化）へといたる過程をマクロに描き，またそのように発展した現代社会において要求される個人の社会心理学的な発達分化について，ミクロな面でも語っていこうという志を明らかにしているという程度の研究方針の表明を，読みとっておくべきだろう。

４．バージェス博士論文の概要

人間の知的，技術的なさまざまな進歩は，社会にはぐくまれた個々人の発想によって具

体化され，社会全体で共有されていく複雑な網の目のような社会化という過程のなかで定着し，その定着した状態を土台にさらに次の進歩をもたらす発明，発見がなされると，スモールの着想にしたがいつつバージェスは述べる。それをイギリスにおける発明，発見史，政治史を通じて概観していくというのが，それぞれ第 1，2 部の内容である。第 2 部の末尾部分では，ウェッブ夫妻の『労働組合運動史』（Webb & Webb [1894] 1911=1973）を引用しつつ，歴史上の具体的事実の記述と分析の部分を終えている。すなわちここでは，フェビアン主義者の主張を中心に，社会学自体を生みだす母胎となった19世紀の社会主義の動向を，彼なりに総括しているといえるだろう。イギリス史について，本書第 1 部では科学的知識が開発され，社会に恩恵をもたらすように実用化されるまでを，第 2 部では諸民族の闘争を経て議会政治が育まれ，組合活動を通じた労使の闘争をへて諸資源，産業が合理的な管理をなしうる状態で社会的に共有されていく方向に向かう歴史を，考察している。

以下，部ごとに順を追って概要を紹介していく。

第 1 部「発見と発明における社会化の役割」は，諸個人の創意工夫が社会のなかで集合的に発揮された結果としての発見発明史の記述である。イギリスの事例にもとづき，進化論の発見，紡績機械，電信システムの発明などを，ケーススタディ的に列挙し，その同時多発性をある種の法則のように提示する。この点では，サムナーの『フォークウェイズ』やのちのオグバーンの文化遅滞論などへの類縁性が現れている（Sumner 1906=1975; Ogburn [1922] 1950）。前述のヴィンセントの社会進化論的，発生反復説的な人間文化全般の進歩を取りこんだ統合的なカリキュラムとも呼応する。スモールとウォードの論争と照らしあわせた場合，発明，発見が多発する文化的に成熟した状況を，教育により人為的に作りだせるという潜在的なメッセージを発しているともいえる。

第 2 部「社会の進歩における社会化の役割」は政治制度史である。古代ローマ時代からイギリスの民族史を説きおこし，スモールやパークが学問の出発点とした闘争の社会学との連続性を示している（鎌田 2007）。ちなみにバージェスが本書で，古代の部族社会からローマ時代までを「血族的」，ノルマン・コンクエスト以降の封建制，産業革命期までを「個人的」，資本家と労働者の非個人的な雇用関係を中心に社会が動く時代を「非個人的」と 3 段階に区分しているのは，「神学的」「形而上学的」「実証的」と分けるコントの 3 段階説の区分を見ならったためらしい[10)]。

バージェスはマグナ・カルタから名誉革命を経てイギリスの立憲君主制，議会制，そして労働組合運動が発達するまでを記述している。こうした論じ方はフランス革命を契機として人権思想の発祥を見る英米圏でのオーソドックスな歴史観を示しているともいえる。イギリスのフェビアン社会主義や，トインビー・ホールなどのセトルメント活動に強い影響を受けたアメリカ知識人のあいだでは，マグナ・カルタからチャーティズム，メソディズムへと展開するイギリスの労働運動の歴史に，人権思想の起源を求める視点はごく普通のものだった（Mann 1956）。

ただし，労働組合活動，社会主義の淵源を炭鉱で活動するメソディスト宣教師らの巡回説教活動に求めるなど，労働運動の宗教的起源を論じている点は，のちの宗教（キリスト教）社会学，社会主義史の理解においても独自である（Burgess 1916: 147–151）。こうした議論は同時代やバージェスらが指導した世代の大学院生の博士論文（Barnhart 1924; Locke

1930）と照らしあわせてみても，バージェスの博士論文にしか見られない。

20世紀初頭のフェビアンたちは帝国主義者でもあり，フェビアン協会は現在の労働党の母体となった政治団体の一つで，現在もシンクタンクとして活動している[11)]（Semmel 1960=1982）。最終的に，アメリカでのニュー・ディール期の福祉的社会事業の試行の経験をも踏まえ，資本主義体制の枠内で福祉的政策を充実させ，労働者や一般庶民の生活向上を図るというフェビアン主義的政策パッケージがイギリスでも成立した。この方向性は，イギリスに限らず日本やアメリカの全政党の主張を包含し，第二次世界大戦中の国家総動員体制を再編し国民の福祉を図る政策パッケージであり，時の政治権力が自発的に社会福祉を選挙民に約束する形で，うえからの福祉国家化という方向に舵を切った国は，すべてフェビアン主義の影響下にあると考えられる。また全体主義的な方向で国民の政治的自由や言論の自由を制限する社会主義の体制においても，やはり少なくとも名目上は国民の福祉について考慮しないでは政権を維持できないので，福祉国家体制を標榜している。

第 2 部第10章では社会学の有力な発想源の一つであった社会主義についての，バージェスなりの考察をまとめている。その部分は，第 3 部の社会化の理論的考察でさらに新しい視点を模索する基盤になっていると，本論では解釈したい。

第 3 部「個人の発達における社会化の役割」で展開される「社会化」は，前半の政治史の結末部分で展開する土地財産の国有化，共有化という意味ではなく，現行と同じく，個人が社会的価値観を取りいれ社会に参加するという意味で語られている。この用法はジョージ・ミード，スモール，エドワード・ロス，チャールズ・クーリー，ゲオルク・ジンメルらの理論を踏まえており，のちの，人類学における文化とパーソナリティ学派や，タルコット・パーソンズの構造機能主義が唱える社会化概念を先取りした定義になっている。ある意味ではトマスのパーソナリティ論に統合されるべきであった論点のレジュメにもなっている。またブルーマーがミードの立場に至る学問的系譜としてジェームズ，デューイ，クーリーらの理論を挙げて編年的に整理したSIの学説史的把握（Blumer 1937）に先駆け，その雛型のようなレジュメになっている。それもミード自身が，社会的自己論や科学論を展開していたまっさいちゅうに作成されている。バージェスの研究経歴を通観すると，博士論文でのこうした展開を踏まえて，『家族』諸版の第二部「家族とパーソナリティの発達」（Burgess & Locke [1945] 1953: 207–330; Burgess et al. 1963: 143–213, 1971: 177–204）が，構成されることになる。

ま と め

従来，バージェスの博士論文の内容をまともに紹介，要約している文献は皆無であった。紙幅の関係で，本論では概要の紹介にとどめ，それ以上の考察は別稿に譲る。唯一の例外は，彼の死後まもない時期に編まれた『著作選集』である。しかしそこでも「社会化論」の先駆的研究として，本書の結論部分が抜粋されている程度で詳細な検討はなされていない（Bogue 1974: 3–7; Burgess 1916: 232–237）。社会学における量的，質的社会調査の草創期に，自身が足跡をしるした全分野で開拓者としての役割を果たしたバージェスが，この段階で学説史に記した最初の一歩を，この博士論文に見ることができる。20世紀社会学の展開に何らかの価値を見出すのであれば，この作品の検討は避けて通れない道であ

ると論者は信じ，これから展開されるべき考察の前提になると思われる諸点を本論で提示した。

今後は，まずバージェスとフェビアニズム，またイギリスの近代化に重要な役割を果たした宗教教派であるメソディズムの関係を考察する（鎌田 2016）ことから，やがて人類学分野で新たな展開を見せる社会化論とバージェスの理論構成の比較検討，さらにバージェスを指導したトマスらを経由したサン–シモン主義の影響関係なども再解釈し，バージェスの学問的形成期について考察する手がかりを増やしていきたい。

注

1）この人物はズーブリンではなく，原語の通りズゥエブリンなどと表記すべきではないかという提言がある（川口 2012）。しかし本論では，経済史などにおいて誤記を参考に人名発音を推定する慣例に従い，Zueblin とすべきところを Zeublin とした誤記（Residents of Hull-House 1895）に，当時の発音が保存されているのではないかと推測し，ズーブリンと表記する。

2）特にバージェスのキャリア中期以降に展開した予測研究を中軸に据え，その発想の原点は何か，またシカゴ大学での都市研究の代表的な解釈枠組となった社会解体論の発想源は何かといった点に留意しながら，彼の量的，質的方法論への貢献を歴史的に位置づけ，啓蒙主義以降の社会主義や統計技法の発展史をひもときつつ論者は考察を進めている（鎌田 2015，2015a）。

3）ラザースフェルドのアメリカでの初期の共著者はストゥファーである（Stouffer & Lazarsfeld [1937] 1972）。またラザースフェルドはストゥファーの著作選集に序文を提供している（Stouffer 1962）。さらにラザースフェルドが，バージェスやストゥファーの予測研究に関するデータ解析の技法として深層構造分析を提示して，現在のパス解析の開発に道をひらいたことも見逃せない（Stouffer et al. [1950] 1973）。すなわち，コロンビア学派とされるラザースフェルド，シカゴ大学から陸軍の軍属となりハーバード大学に転じたストゥファーも，バージェスを中心とするシカゴ大学の人脈の一部と見なすことができる。

4）そもそもストゥファーの学問的出発点となった博士論文は，人々の個人的見解をデータとしてそれを質的に解釈するという作業と，サーストン尺度を構成して計量的に評価するという作業が両立しうるし，計量的解釈が質的解釈と比べても遜色ないものであるということを立証しようとするものだった（Stouffer [1930] 1980）。その意味で，彼の立場は最初から質的データ解釈と尺度構成などを通じた計量的な測定を併用し，両方を研究に役だてようとするものだったといえる。またラザースフェルドの大統領選に関する社会心理学的調査はアメリカ人の研究者が見落としがちな，プロテスタントとカトリックのあいだの宗派別の政治的態度を感受性豊かに考慮しようとするものであったし，彼が導入したパネル調査は，質的研究で取りあつかいうる時間という次元を計量調査に持ちこもうとするもので，計量的技法にエスノグラフィ的な要素を導入する試みと考えられる（Katz & Lazarsfeld, [1955] 1964=1965; Lazarsfeld et al. [1944] 1968=1987）。

5）ボーグによるバージェス小伝では，ベンゾニア・アカデミーはベンゾナ（Benzona）・アカデミーと表記されているが，*Who Was Who* の記載と照合して訂正した（Bogue 1974a: xii; *Who Was Who in America* 1968: 137）。

6）博士論文と平行して作成されたバージェスの著作として，カンザス州でブラックマーと協力して進めたソーシャル・サーベイが存在する。この調査では映画館などの娯楽施設の調査において，グループでの参与観察をおこなっている部分がある。学生がチームを組んで調査データを集める技法は，のちのシカゴ大学での博士論文の指導体制を髣髴とさせる（Blackmar &

Burgess 1917: 74–87)。

7）その件については別稿にて取りあつかうことにしたい。1950年代以降の「社会化」概念の含意については，Burton et al. (1968) を参照。

8）バージェスはサン–シモンではなくコントを愛読していたとされる（Bogue 1974a: xxiv)。コントに由来するものであるかどうかはさておき，サン–シモンの着想は，トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』（Thomas & Znaniecki [1918–20] 1974）経由で，バージェスおよびシカゴ学派の社会学全般に継承されていると論者は考えている。ヨーロッパの思想界の再組織を志しつづけたサン–シモンとは逆に，工業化が進みつつある社会で，過去の伝統的な価値観を復興することで秩序回復を図ろうとする動きが，フランスのフレデリック・ルプレを中心に興った家族研究であり，こちらの傾向もバージェスを経由して現在の家族社会学に接続されている（Le Play 1982)。さらに失われていく中世や封建時代の価値観の喪失を嘆き，郷愁をうたうのは19世紀末のロマン主義であり，それは政治的保守主義とも呼ばれて知識社会学の好個の分析事例を提供している（Mannheim 1986)。

9）1930年代の「社会化」概念の含意については Cole (1930) を参照。フェビアン主義者たち自身の主張を検討したところ，特にバーナード・ショーを中心に土地の賃貸料，地代（rent）を国有化する，また鉱山資源を国有化するなどの主張が実際になされていた（Shaw & Wilshire [1889] 1891)。ただしこうした考え方は20世紀初頭の段階では，来るべき軍事的危機を前にした国家総動員体制の布石と考えるべきかもしれない。カール・シュミットが分析しているワイマール憲法にも，鉱山資源の国有化という条文が含まれている（Schmitt [1928] 1954=1974)。バージェスは特にアメリカで資産を国有化しよう，または社会で共有しようなどと主張しているわけではないが，文明が進むにつれてそうした方向性が出てくるという論旨でイギリス史をまとめている。実際の社会史的事実を考慮すると，この時点ではまだ明らかになってはいないが，当時の意味でいう「社会化」は，イギリスでは第二次世界大戦後に生じる福祉国家化の方向性を大まかに指ししめすものであった（鎌田 2016：58, 61)。アメリカでは大不況の際のニュー・ディール政策において社会福祉法が制定されるなど，フェビアニズムの影響を受けた福祉分野の研究者によりアメリカ流の福祉政策が導入されはじめ（Diner 1980: 176–186)，それはわが日本にも GHQ による占領政策を通じて移植されていく。

10）はっきりとコントにならった区分であると述べられているわけではないが，バージェスが設定した 3 段階は，コントの 3 段階説と同様，厳密なものではないと述べている（Burgess 1916: 72)。

11）ファビアン協会の HP アドレスは以下の通り。http://www.fabians.org.uk/ (2015年 9 月15日閲覧)

参照文献

Abbott, Andrew, 1999, *Department & Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, Chicago: University of Chicago Press.（=2011, 松本康・任雪飛訳,『社会学科と社会学――シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社.）

Barnhart, Kenneth Edwin, 1924, "The Evolution of the Social Consciousness in Methodism," Unpublished PhD. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago.

Bell, Daniel, 1968, "Socialism," David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 14, New York: Macmillan, 506–534.

Blackmar, Frank W. and Ernest W. Burgess, 1917, *Lawrence Social Survey: Report to the Lawrence Social Survey Committee*, Topeka: Kansas State Printing Plant.

Blumer, Herbert, 1937, "Social Psychology," Emerson P. Schmidt, ed., 1937, *Man and Society: A*

Substantive Introduction to the Social Sciences, New York: Prentice-Hall, 144–198.
Bogue, Donald J. (ed.), 1974, *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Chicago: Community and Family Study Center, University of Chicago.
—— 1974a, "Introduction," Bogue 1974: ix–xxv.
Burgess, Ernest W., 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press.
—— 1916a, "Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology," *American Journal of Sociology*, 21: 492–500.
—— 1923, "The Growth of the City." *Publications of the American Sociological Society*, 18: 85–97.（Park & Burgess [1925] 1984: 47–62に再録.）（=1972, 大道安次郎, 倉田和四生訳『都市――人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会：49–64.）
—— 1927, "Statistics and Case Studies as Methods of Sociological Research," *Sociology and Social Research*, 12: 103–120.
—— 1927a, "The Determination of Gradients in the Growth of the City," *Publications of the American Sociological Society*, 21: 178–184.
—— (with Clark Tibbitts), 1928, "Factors Making for Success or Failure on Parole," Bruce, Andrew A., Albert J. Harno, Ernest W. Burgess and John Landesco, [1928] 1968, *The Workings of the Indeterminate-Sentence Law and the Parole System in Illinois: A Report to the Honorable Hinton G. Clabauch, chairman, Parole Board of Illinois*. Montclair, N. J.: Patterson Smith, 203–249.
—— (ed.) 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: University of Chicago Press.（=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社.）
Burgess, Ernest W. and Donald J. Bogue (eds.), 1964, *Contributions to Urban Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
Burgess, Ernest W. and Leonard S. Cottrell, Jr., [1939] 1998, *Predicting Success or Failure in Marriage*, London: Routledge/Thoemmes.
Burgess, Ernest W. and Harvey J. Locke, [1945] 1953, *The Family: From Institution to Companionship*, 2nd ed., New York: American Book Co.
Burgess, Ernest W. and Paul Wallin, 1953, *Engagement and Marriage*, Chicago: J. B. Lippincott.
Burgess, Ernest W., Harvey J. Locke and Mary Margaret Thomes, 1963, *The Family: From Institution to Companionship*, 3rd ed. New York: American Book Co.
——, ——, —— 1971, *The Family: From Traditional to Companionship*, 4th ed., New York: Van Nostrand Reinhold.
Burton, Roger V., John W. M. Whiting, Fred I. Greenstein and Orville G. Brim, Jr., 1968, "Socialization," David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 14, New York: Macmillan, 534–562.
Cole, G. D. H., 1930, "Socialization," Edwin R. A. Seligman, ed., [1930] (1937), *Encyclopaedia of the Social Sciences*, V.14, London: Macmillan, 221–225.
Comte, Auguste, [1830–1842] 1968–69, *Cours de Philosophie Positive*, T.1–6, Paris: Èditions Anthropos.
Diner, Steven J., 1980, *A City and Its Universities: Public Policy in Chicago, 1892–1919*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
Guerry, André-Michel, 1833, *Essai sur la statistique morale de la France*, Paris: Crochard.（http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k83320s. 2015年9月12日閲覧）
Howard, Ronald Lee, 1981, *A Social History of American Family Sociology, 1865–1940*, Westport, Conn.: Greenwood.（=1987, 矢野和江訳『アメリカ家族研究の社会史』垣内出版.）

Hoyt, G. C., 1954, "The Life of the Retired in the Trailer Park," *American Journal of Sociology*, 59: 361–370.
鎌田大資，2007,「シカゴ学派社会学の揺籃期――ドイツ闘争の社会学の移入と移民周期説」『椙山女学園大学研究論集』38（社会科学篇）：71–83.
―― 2015,「公共圏と市民社会の学としての社会学――英仏市民革命期における二つの思想潮流」『椙山女学園大学研究論集』（社会科学篇）42：1–12.
―― 2015a,「コンドルセに由来する二つの遺産――量的，質的社会調査の発生と展開」『人間関係学研究』13：51–64.（椙山女学園大学）
―― 2016,「アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解――フェビアニズムとメソディズムをめぐって」『人間関係学研究』14：49–66.（椙山女学園大学）
Katz, Elihu and Paul Felix Lazarsfeld, [1955] 1964, *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, Free Press.（=1965，竹内郁郎訳『パーソナル・インフルエンス――オピニオン・リーダーと人びとの意思決定』培風館.）
川口晋一，2012,「チャールズ・ズゥエブリンとシカゴ・レクリエーション運動の萌芽――社会改良から総合都市計画へ」『立命館大学産業社会論集』48(1)：155–180.
Lazarsfeld, Paul, Bernard Berelson and Hazel Gaudet, [1944] 1968, *The People's Choice: How the Voter Makes Up His Mind in a Presidential Campaign*, 3rd ed, UMI Books on Demand.（=1987，有吉広介監訳,『ピープルズ・チョイス――アメリカ人と大統領選挙』芦書房.）
Le Play, Frédéric (ed., trans., intro., Catherine Bodard Silver), 1982, *On Family, Work, and Social Change*, Chicago: University of Chicago Press.
Locke, Harvey James. 1930. "A History and Critical Interpretation of the Social Gospel of Northern Baptists in the United States." PhD. dissertation, Department of Christian Theology and Ethics, University of Chicago.
―― 1951, *Predicting Adjustment in Marriage: A Comparison of a Divorced and a Happily Married Group*, New York: Henry Holt.
Lyman, Stanford M. and Arthur J. Vidich, 1988, *Social Order and the Public Philosophy: An Analysis and Interpretation of the Work of Herbert Blumer*, University of Arkansas Press.
Mann, Arthur, 1956, "British Social Thought and American Reformers of the Progressive Era," *Mississippi Valley Historical Review*, 42: 672–692.
Mannheim, Karl (eds., David Kettler, Volker Meja and Nico Stehr), 1986, *Conservatism: A Contribution to the Sociology of Knowledge*, London: Routledge & Kegan Paul.
Mead, George Herbert (ed., intro., Charles W. Morris), [1934] 1962, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press.（=1973，稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店；=1995，河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社.）
Ogburn, William Fielding, [1922] 1950, *Social Change: With Respect to Culture and Original Nature*, New York: Viking.
Ohlin, Lloyd E., 1951, *Selection for Parole: A Manual of Parole Prediction*, New York: Russell Sage Foundation.
Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
――, ―― (eds.) [1925] 1984, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: University of Chicago Press.（=1972，大道安次郎・倉田和四生訳『都市――人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会.）

Residents of Hull-House, 1895, *Hull-House Maps and Papers: A Presentation of Nationalities and Wages in a Congested District of Chicago (Together with Comments and Essays on Problems Growing Out of the Social Conditions)*. New York: Thomas Y. Crowell.

Schmitt, Carl, [1928] 1954, *Verfassungslehre*, Berlin: Duncker & Humblot.（=1974，安部照哉・村上義弘訳，『憲法論』みすず書房.）

Semmel, Bernard, 1960, *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought, 1895–1914*, London: George Allen and Unwin.（=1982，野口建彦・野口照子訳，『社会帝国主義史――イギリスの経験 1895–1914』みすず書房.）

Shaw, Bernard, and Gaylord Wilshire (eds.), [1889] 1891, *Fabian Essays in Socialism*, New York: Humboldt.（http://lf-oll.s3.amazonaws.com/titles/298/0066_Bk_Sm.pdf. 2014年5月19日閲覧.）

Small, Albion W., 1903–1904, “Note on Ward’s “Pure Sociology.”(I)–(III),” *American Journal of Sociology*, 9: 404–407, 567–575, 703–707.

Stouffer, Samuel A., [1930] 1980, *An Experimental Comparison of Statistical and Case History Methods of Attitude Research*, New York: Arno.

―― (Intro., Lazarsfeld, Paul F.), 1962, *Social Research To Test Ideas: Selected Writings of Samuel A. Stouffer*. New York: Free Press of Glencoe.

Stouffer, Samuel A. and Paul F. Lazarsfeld (with the assistance of A. J. Jaffe), [1937] 1972, *Research Memorandum on the Family in the Depression*, New York: Arno.

Stouffer, Samuel A., Louis Guttman, Edward A. Suchman, Paul F. Lazarsfeld, Shirley A. Star and John A. Clausen, [1950] 1973, *Measurement and Prediction*, Gloucester, Mass.: Peter Smith.

Stouffer, Samuel A., Edward A. Suchman, Leland C. DeVinney, Shirley A. Star and Robin M. Williams, Jr., [1949] 1977, *The American Soldier: Adjustment during Army Life* (V.1), Manhattan, Kansas: Sunflower University Press.

Stouffer, Samuel A., Arthur A. Lumsdaine, Marion Harper Lumsdaine, Robin M. Williams, Jr., M. Brewster Smith, Irving L. Janis, Shirley A. Star and Leonard S. Cottrell, Jr., [1947] 1977a, *The American Soldier: Combat and Its Aftermath* (V.2), Manhattan, Kansas: Sunflower University Press.

Sumner, William Graham, 1906, *Folkways*, New York: Ginn.（=1975，青柳清孝・園田恭一・山本英彦訳，『フォークウェイズ』青木書店.）

Thomas, William Isaac and Florian Znaniecki, [1918–20] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, V. 1, 2, New York: Octagon Books.

Thurstone, Louis Leon, 1928, “Attitudes Can Be Measured,” *American Journal of Sociology*, 33(4): 529–554.

―― 1947, *Multiple-Factor Analysis: A Development and Expansion of the Vectors of Mind*, Chicago: University of Chicago Press.

Trent, James, 1987, “A Decade of Declining Involvement: American Sociology in the Field of Child Development, the 1920s,” Patricia A. Adler and Peter Adler, eds., *Sociological Studies of Child Development*, V.2, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 11–37.

Vincent, George Edger, [1897] 2009, *The Social Mind and Education*, BiblioLife.

Ward, Lester F., [1883, 1897] 1911, *Dynamic Sociology or Applied Social Science as Based upon Statical Sociology and the Less Complex Sciences*, Vol. 1, 2, New York: D. Appleton and Co. (http://socserv2.mcmaster.ca/~econ/ugcm/3ll3/ward/dynamic1.pdf; http://socserv2.socsci. mcmaster.ca/econ/ugcm/3ll3/ward/dynamic2.pdf. 2014年5月19日閲覧.）

―― 1903, *Pure Sociology: A Treatise on the Origin and Spontaneous Development of Society*, New York: Macmillan.(http://socserv2.socsci.mcmaster.ca/econ/ugcm/3ll3/ward/puresoc.pdf. 2014年5月19日閲

覧.）（=1924，石川功訳，『純正社会学』上巻，新潮社.）

Webb, Sidney and Beatrice Webb, [1894] 1911, *The History of Trade Unionism*, New ed., London: Longmans, Green.（http://ia600401.us.archive.org/0/items/cu31924032472601/cu3192403 2472601.pdf. 2013年6月25日 閲覧.）（=1973，荒畑寒村監訳・飯田鼎・高橋洸訳，『労働組合運動の歴史』上下巻，日本労働研究機構. 底本は1920年版.）

Who Was Who in America, 1968, V.4 (1961–1968), Chicago: Marqui's *Who's Who*.

Zueblin, Charles, 1898, "Municipal Playgrounds in Chicago," *American Journal of Sociology*, 4: 145–158.